

インタビュー・プロジェクト

国際教養学部 アジア学科 梅村 修

I はじめに

「インタビュー・プロジェクト」は、本年度、5年目を迎えた。毎年、留学生対象の「日本語読解上級1・2」の授業の中で行われている。

まず、例年同様、「インタビュー・プロジェクト」と、それに先立つ「読解フィールドワーク」の定義や背景を説明し、その教育目的を明らかにしておきたい。そして、新たな授業実践とその成果、そして残された課題を報告する。

II 「インタビュー・プロジェクト」および「読解フィールドワーク」の定義

「インタビュー・プロジェクト」とは、外国語の学習者が、ある話題について当該外国語で聞き取り調査をし、それをまとめるプロジェクト・ワーク、広義の体験学習の一つである。一方、「読解フィールドワーク」とは、この「インタビュー・プロジェクト」に先立つ学習活動と位置づけられる。すなわち、自分の興味や関心の所在を発見するために、広く様々な文献に当たり、インタビューのテーマを絞り込むために行われる活動である。

このように、「インタビュー・プロジェクト」と「読解フィールドワーク」は、連動しており、どちらか一方が主で、どちらか一方が従、という関係にはない。すなわち、「インタビューという将来のタスクのために、日本語の文献を読む」という面もあれば、「日本語の読解作業を意義のあるものにするために、インタビューという目標が設定されている」という面もある。

このことを敷衍すれば、次のようにならうか。

周知のように、フィールドワークとは、教室や研究室を出て、現場で調査したり、観察したりする研究手法をいう。読解におけるフィールドワークとは、そのアナロジーであり、教材として用意された教科書やテキストから離れて、新聞、書籍、雑誌、インターネットなどの生の文章を、自律的・主体的に読み進めていく活動を意味する。この活動を通して、「自分が本当に興味を持っていることは何か」を留学生自身が発見する。興味のあるテーマさえ発見できれば、日本語の読解は楽しいはずである。さらに問題意識が深まれば、日本人にインタビューして確かめてみたいことも、おのずと出てくるにちがいない。

また、近い将来、日本人にインタビューを敢行しなければならないとなれば、インタビューイから有意義な発言を引き出すために、自分の関心のありかを探り、それを深めて、新聞や雑誌な

ど、さまざまな日本語の言説に触れようとするにちがいない。

Ⅲ 「インタビュー・プロジェクト」および「読解フィールドワーク」の背景

実際の授業について述べるまえに、筆者が留学生対象の「インタビュー・プロジェクト」を思い立った事情を簡単に述べる。

留学生にとって、大学での学習の大半は、講義を聴くこと、文献資料を読むことに費やされる。したがって、留学生が日本の大学で学習を滞りなく進めていくためには、なにはともあれ、日本語で情報をインプットする能力の養成が先決である。そのために、1、2年生を対象に、日本語の読解と聴解の科目が設置されているのは、理にかなっている。

ところが、大学における日本語の読解・聴解の授業には、多くの難しさがある。

第一に、差し迫った日本語の学習動機に乏しい。留学生は、大学入学という明確な目標をクリアしてホッとしている。その上に、さらに高度な日本語力を学び直そうとはなかなか思わない。

第二に、大多数の留学生にとって、日本語の習得は、留学の目的ではなく、手段に過ぎない。彼らの目的は、日本の経済発展のからくりやハイテクの知識を学び、学位を取得して帰国することである。日本語学習は、いわば「急がば回れ」の方便であり、足りない日本語はできれば実地に学びたい、というのが彼らの本音である。

以上のような困難にくわえて、授業の内容面の難しさも指摘しなければならない。

すなわち、多くの留学生にとって、日本語の授業中にあてがわれる読解教材や聴解教材は、学ぶ必然性に乏しいのである。専門科目の授業で使うテキストの読解や聴解ならともかく、自分の興味や関心からかけ離れた文章を、受験勉強でもないのに、なぜ読み解かなければならないか、聴き解かなければならないか。かといって、日本語教師からすれば、専門も関心もさまざまな留学生を、一様に満足させる教材など用意できるわけもなく、結果的にステレオタイプな日本(人)論の類を、「日本語の訓練」という名目で押し付けることになってしまう。無理強いされたテキストの解説がおもしろいわけがない。やがて、留学生は日本語の授業に、たいした期待を寄せなくなってしまうのである。

Ⅳ 「インタビュー・プロジェクト」および「読解フィールドワーク」の教育目的

こうした大学における日本語の読解・聴解の授業にまつわる難しさを、どうしたら打開できるか。自問自答を繰り返し、たどり着いた結論が「読解フィールドワーク」と「インタビュー・プロジェクト」だった。その教育目的は、次の3点である。

- (1) 日本語の読解・聴解の授業を、留学生にとって、もっと内発的動機に溢れた有意義なものにしたい。言い換えれば、ある明確な目的をもって、読んだり聴いたりする授業を展開したい。
- (2) 既成の日本語の談話教材、なかでも読解教材には、テーマや論旨に著しい偏りがある。また、留学生が抱く日本（人）観には、こうした偏向した読み物からの影響が少なくない。そうしたステレオタイプの日本（人）観を打破して、日本（人）の多様性を発見するような授業を展開してみたい。
- (3) 留学生は、大学内の日本人とまじめに率直な議論をした経験が少ない。また、日本人（一般学生や教職員）も留学生を遠巻きにして近寄ろうとしない傾向がある。留学生、日本人双方のインターアクションを高めて、両者の気づきを誘発したい。

おおまかに書くと、上記のような意図の実現のためにシラバスを組み立てた。中でも、(1)と(2)は筆者長年の思いであり、過去にもタスク・リーディング (task reading) の試み、多読 (extensive reading) の試みなど、いろいろ試してはみたものの、一度として手ごたえのある授業ができたことがなかった。上の授業目的を達成するために計画・立案したシラバスが「インタビュー・プロジェクト」および「読解フィールドワーク」だった。

V 「インタビュー・プロジェクト」および「読解フィールドワーク」のシラバス

■ 1. 動機付け

まず、のっぴきならない課題を留学生に宣言する。それは

「夏休みが明けたら、日本人に聞き取り調査（インタビュー）をして、その成果を報告集にまとめて出版する」

という表明である。そして、

「いいインタビューをするために、春学期から準備を進める。まず、日本や日本人について、自分がいちばん興味をもっているテーマを探す。そして、問題提起をし、仮説を設定する。

そのためには、たくさんの文献を読み漁ってほしい」

とぶち上げる。すなわち、教室を離れて、図書館やウェブサイトを読解のフィールドにして、自分の興味や関心の赴くまま、好きな文章を読み深めていてもらいたいと宣言する。そして、この活動を「読解フィールドワーク」と名づける。

■ 2. 授業目的の説明

まず、従来の日本語読解の授業のイメージを払拭してかかることが重要だと考えて、授業のは

じめに、次のように「読解フィールドワーク」のねらいを説明した。

- (1) 「読解フィールドワーク」は、秋学期からの「インタビュー・プロジェクト」のためのテーマ探し、およびテーマの掘下げのために行われる。
- (2) 「読解フィールドワーク」は、教師主導で同一のテキストを一緒に読み進めていく教室活動ではない（そもそも、専門も関心もさまざまな留学生を、一様に満足させる読解教材など存在しない）。「読解フィールドワーク」では、学生が読みたい文章を自分で探し出してきて読んでもらう。

そして、次のような注意を促した。

「読解フィールドワーク」の時間は、一斉授業ではないから、その学習成果は自己責任による個人差が非常に大きくなる可能性がある。すなわち、学生は、怠けようと思ったらどれだけでも怠けられるし、学ぼうと思ったらどれだけでも学べる時間である。

さらに、

「教師は、いつも教室内に待機していて、学生個人の学習を補助するために存在する。できるだけ教師を上手に活用するように。」

と指示した。

■ 3. 読解フィールドワーク

(1) テーマをさがす

自分にとって関心のあるテーマを見つける。そのために、毎回の授業の初めに、「アエラ」「読売ウィークリー」「週刊東洋経済」「Newsweek」などの週刊誌の記事の目次をインターネットでチェックさせ、興味をもった記事を手当たり次第に読ませていった。

(2) テーマを決定する

上記のテーマ探しのための読解作業を通して、留学生は自らの興味や関心のありかを発見する。

(3) テーマを深める

テーマを決定したら、同一テーマをあつかった文献を広く、深く読む。とくに、図書館のOPACシステムによる文献検索や情報収集のスキルは、大学での研究発表や論文作成のために欠かせない。また、各種のデータベース（Japan Knowledge、MAGAZINE PLUS、CiNii、国立国会図書館のNDL・OPACなど）の存在も知らせ、効率的な検索の手ほどぎをした。

■ 4. インタビュー・プロジェクト

(1) インタビュー内容の検討

テーマについて、書籍や雑誌やインターネットなどで、できるだけ多くの文字情報に当たるだけでなく、自分の体験や見聞、故国との比較を交えて、インタビューの質問項目を文章化する。

(2) 仮説の設定

テーマについて、文献から得た情報や、自分の体験や見聞をもとに問題提起をし、仮説を設定する。

(3) インタビュー対象者のパーソナル・データの収集

インタビューの対象者（1人5名）の性別や年代や立場をできるだけ把握しておく。

(4) インタビュー対象者との連絡

インタビュー対象者と連絡をとって、事前に、インタビューの日時・場所などを約束する。また、インタビューの目的や大まかな質問内容、所要時間などをインタビュー対象者に伝えておく。さらに、録音の可否、印刷・出版の可否も聞いておく。

(5) インタビュー（取材）

インタビューを実施する。聞きながら、メモを取ったり、録音したりする。

(6) データ作成

メモしたり、録音したりした内容を、忠実に書き起こす。書き起こしたデータは、デジタルベースと紙ベースで、5回に分けて、中間レポートとして期日までに教務課に提出する。

(7) 事実関係の確認、校閲のお願い

レポートを書く前に、書き起こしたデータを当該インタビューーに読んでもらい、事実関係に間違いがないかどうか、校閲をお願いする。後日、校閲済みのデータを受け取る。

(8) 仮説との突合せ、見直し

インタビューの結果、わかったことを仮説と突き合わせて、一致点と不一致点を洗い出す。その結果、仮説がインタビューから立証されなかった場合、どこを、どのように修正したらよいかを考える。そして、その場合は、もう一度、(2)にもどり仮説を設定しなおす。

(9) レポート作成

テーマについて、インタビューの結果、明らかになったことを、レポートにまとめる。レポートを書く際には、校閲済みのデータを踏まえて、自分が考えたことを書くよう指導する。また、レポートは、序論・本論・結論の三段構成で、最低 4000 字は書くものとし、ワード文書で提出する。

(10) 報告集作成

各自が仕上げたレポートを1冊の報告集にまとめて、大学の図書館に寄贈するとともに、

今回のプロジェクトの関係者に謹呈する。また、報告集作成にあたっては、編集委員を留学生から選び、文体や書式の統一、校正、「目次」「まえがき」「あとがき」「奥付」の執筆などを担当させる。

VI 「インタビュー・プロジェクト」および「読解フィールドワーク」の成果

昨年度の新たな試みは、「インタビュー内容の書き起こし作業」、そして、「インタビューによる校閲」であった。この試みは今年も継続して行われた。

3年目までの問題点の一つに、留学生が「事実」と「意見」を明確に分けて論述できない、という点が指摘された。学術的な文章は、随筆や感想文と違って、調査や観察や実験といった科学的な手続きを経て得られたデータを踏まえて、検証可能・追試可能な言辞で構成されなければならない。留学生の取り組むインタビューも、まがりなりにも学術調査の一つである限り、その成果は、正確なデータを基礎に据えて、そこから導かれたものでなければならないはずである。

ところが、過去の留学生のレポートは、往々にして「事実」と「意見」が峻別されない。すなわち「インタビューが述べた事柄」と「インタビューアが考えた事柄」が一つながりの曖昧模糊とした記述になることが多い。これでは、せつかくインタビュー調査で新しい知見を得ても、仮説を見直すことができない。

そこで、昨年度からは、最終レポートを、序論・本論・結論の三段構成で提出させる前に、5回のインタビューが終わるごとに、インタビューの受け答えをそのまま書き起こさせ、中間レポートとして教務課に提出させることにした。そのためには、取材中のメモだけではおぼつかないので、できるだけボイスレコーダーにインタビューのやり取りを録音させるようにした。

留学生にとって、この書き起こし作業は意外に困難な作業であった。まず、日本人学生と違って、相手の発話を正確に聞き取ることができない。また、たとえ聞き取れても、話し言葉を書き言葉に移し替えることができない。聞いてわかる日本語と、文字に落として読み取れる日本語は、おのずと違うのである。たとえば、話し言葉は、往々にして主述が不对応で、原因と結果が錯綜している。また、言い淀みや言い間違いも頻出する。それを書き言葉で綴りなおすには、大げさにいえば、編集の力量が必要とされる。書き起こしは、一見、頭を使わない単純作業のように見えて、実は今まで培ってきたありったけの日本語力を注ぎ込まなければ完了しない、過酷な課題だったのである。

このように青息吐息で練り上げた中間レポートを、提出前に、くだんのインタビューイに見せて、校閲をお願いした。そこで留学生は、また徹底的に加筆・修正の憂き目(?)にあう。もちろんお忙しいインタビューイには、「斜め読みして事実誤認だけを指摘していただければ十分」とお伝えしたのだが、多くの教職員の方々は、日本語教師顔負けの朱入れや懇切なコメントを添えて

くださり、まったく恐縮の至りであった。こうして、お一人のインタビューは、「インタビューの日時・場所の約束」「インタビュー」「校閲」と、都合3回以上、同じ学生と会って言葉を交わしたことになる。

VII インタビューに応じてくださった教職員の声

毎年、書くことだが、今年もインタビュー・プロジェクトを通して、留学生が本学の教職員や学生と、社会的な問題について、率直に意見を交換できたことはたいへんよかった。双方にとって、気づきを誘発する出会いが何件かあったと思う。留学生は、多様な日本人の考え方に触れて、慣れ親しんだステレオタイプな日本（人）観を修正できただろうし、日本人は、日頃、不思議にも疑問にも思わない質問を留学生に突きつけられて、あらためて考えたことも多かったのではないだろうか。

ところで、インタビュー・プロジェクトでは、毎年、1回のセッションが終わるたびに、インタビューから「評価表」なるものをいただいている。本稿末に Appendix として、評価表のフォーマットを載せたので参照していただきたい。

当然ながら、インタビューの善し悪しを決めるのは当事者だけである。本プロジェクトの主宰者は梅村だが、私は基本的にインタビューの現場には立ち会わない。そこで、インタビューの皆様には、重ね重ねまことにお手数ながら、インタビューをした学生のマナーや日本語能力について、短いコメントを書いていただいている。それを、順不同でご紹介し、感謝の意に代えたいと思う。

- 思った以上に日本語が上手であった。労働者問題について、偏見を持っている部分があるのでは？
- 「日本人は・・・」と聞かれると私は答えられません。いろいろな日本人がおりますので。
- 真面目で質問を忠実にしようとしていた。話題となるネタは持っていたので、それをうまく使って展開すればよいのに、と思いました。
- 明るく、とても日本の生活になじんでいる印象でした。楽しかったです。
- 外国人として時には差別的な扱いを受けながらも、たくましく生きているように感じた。日本語をさらに勉強し、レベルアップができればなお良いと思います。
- 終始熱心な態度でした。準備もしっかりしていていいと思いました。難しいテーマでちょっと苦労しました……。
- 非常に丁寧にインタビューを行っていました。私の回答に対して、さらに掘り下げて質問があればなお良かったと思います。

- 質問項目もきちんと準備しており、熱心な勉強姿勢がみられました。この学生との出会いに喜びを感じています。
- 自分の意見を主張するだけでなく、こちらの話をお聞き、理解しようという姿勢がとてもよく表れていました。
- 大きなテーマであることもあり、たいへんそうでした。一方で質問の仕方について、考えた跡がうかがえました。
- たいへん礼儀正しく、丁寧な学生でした。事前準備もしっかりしていたと思います。私の方が気が利いた答えを返せず、申し訳なかったです。
- テーマに沿って、多方面から考え、意見を集約しようという姿勢を感じる事ができました。

VIII 留学生の声

次に、今年の「読解フィールドワーク」および「インタビュー・プロジェクト」を体験した留学生は、どんな感想を抱いているだろうか。以下に書き留めておきたい。

■キ シンさん

この一年間、『読解フィールドワーク』と『インタビュー・プロジェクト』を通じて、まず、日本語の読解能力と書く力を伸ばすことができました。

具体的に言うと、春学期の授業と夏休みをかけて、私たちは自分で決めたテーマに関する本、雑誌あるいは新聞を読んで、情報収集するという『読解フィールドワーク』を行いました。この作業は、まず決まった時間で文章を読むことによって、短時間で正しい情報を得られる能力を鍛えました。また、文章を読むとき、知らない単語があったら、その単語の意味を調べて覚えることによって、日本語の語彙の量を増やすこともできました。さらに、『読解フィールドワーク』は、単に文章を読むだけでなく、最後に読んだ文章を文字で簡潔にまとめなければいけませんから、得た情報をいかに正しい文章にまとめるかについても勉強することができました。

秋学期の授業から、担当の梅村先生からインタビュー対象者の個人情報をもって、インタビュー対象者と約束を取って、そしてインタビューを行いました。インタビューの前に、インタビュー対象者と約束を取る時とインタビューを行う時に、対象者の立場、年齢の違いによって、言葉遣いは変えたり、丁寧な日本語を使ったりしなければならぬと知り、日本語の難しさを実感しました。また、同じ質問に対して、年齢、経験といったものが違うことによって、得られた答えも様々でした。ですから、物事を考える時、様々な角度で考えるべきだし、様々な人の意見を聞くのも大事なことだと私は思いました。そして、『インタビュー・プロジェクト』では、何より大変なのは、録音したインタビューを文字という形にすることです。春学期に行った『読解

フィールドワーク』を通して、簡潔に文章をまとめる力を身につけたような気がしましたが、いざ話し言葉を書き言葉に変えて文章にすることになるとやはり難しいです。しかし、この『インタビュー・プロジェクト』をまとめあげた時、今まで苦手だった部分にも自信が付いたと思いました。

■藤 霏霏さん

今学期のインタビュー・プロジェクトを通して、いくつかのことを学んだ。

まず、インタビューする際に、相手によって、言葉遣いに物凄く注意しなければならないことである。そこで、敬語や謙譲語の使い方がもっと上達になれるようにしっかり覚えていかなければならない。これは、我々留学生にとって、難しいことだが、勉強にもなることでもある。

そして、二つ目は、インタビューする際の問題である。自分が関心を持っている話題については、まず簡単かどうかにかかわらず、質問をいっぱい作る。相手がきちんと答えるような質問を作ることが大事な点である。「yes」また「no」のような答えが出てくる質問はよくない質問であることをしっかり自覚した。

最後に、自分が関心をもっていることに対して、もっと色々な面からわかってきた。専門家の考え方や普通の人の考え方、また、そのことに対して今も悩んでいる人の考え方などがよく分かったのだ。インタビューを通じて、もっと真実に近づいてきたような感じがしたのだ。

以上の三つが、私がこのインタビュー・プロジェクトを通して、わかってきたことである。

■朴 英さん

一年間のインタビュー・プロジェクトを通じて、5人のインタビュー相手と直接会って、書く能力、聞く能力、話し合うコミュニケーション能力などを身に付けました。

私は「日本人と中国人のサービスに対する考え方の違いについて」と言うテーマについてインタビューをしました。日本社会で、元々持っている品格道徳感、謙虚な気持ちや気遣いや気配りなどといった日本人的な特性だと思います。中国のサービスは、まだ、日本のサービスより整っていないと思います。特に日本のような丁寧さや親切さなどの面ではまだまだだと思います。

ところが、昔から「お客様は神様です」というふうに言われた日本でしたが、時代の流れに伴って、徐々に変化してきているとインタビューを通じてわかりました。

日本人は、割と相手の立場を配慮しながらモノを考えたり、発言するように生まれたときから習慣づけられてきましたが、現在の日本サービスは、マニュアル通りの対応で、人間的な要素が少ないという現状も感じられました。一方、中国のサービスは、マニュアル化より相手関係で成り立っているサービス対応が多いことに気付きました。

心から感謝の気持ちがなければ、本当の笑顔もサービスも生まれないのだと知らされました。

5人のインタビューを通じて学んだことは、いま日本に住むことを通して、私が自分の国のサービスの良さも悪さも客観的に見られるようになったことです。また、インタビュー全体を契機に、今の中国は、日本の「おもてなし」という丁寧なサービス、そしてお客様に合わせたサービス精神を勉強したほうが良いと思いました。

■姜 喜さん

この授業で、自分が気になっていることを勉強した以外に、いろいろな新聞を読んだり、いろいろな先生と会話したりして、将来にすごい思い出ができたと思う。

なぜなら、第一に、「読解フィールドワーク」を通じて、まず、現在の日本の記事や起こった問題などを読ませてもらって、いろいろな授業に対して、レポートや論文に役に立つと思う。また、私はパソコンが下手だが、この授業のおかげで、少しだけできるようになったのだ。

第二は、「インタビュー・プロジェクト」を通じて、いろいろな先生と会話して、分析して、良くわかるようになった。また、インタビューの時に音声を録音させていただいて、その内容をまとめたり、文法の間違いを直したりして、すごく日本語のレベルがアップしたと思う。

最後に、二つの課題で、日本の文化や日本の礼儀などが勉強になったと思うから、出版まで、今までの努力をあきらめないように 精一杯にやってみたいと思う

■郭 忠陽さん

この授業では、インタビュー・プロジェクトをさせてもらいました。私はいろいろなことを学びました。まず、コミュニケーションの能力が伸びました。今回のインタビューの相手は5人います。この5人は各人の職業と地位が全員違います。この5人の日本人にインタビューする時、いろいろな敬語の使い方を考えました。このインタビューを通じて、相手によって、日本語の表現手法も違うことを勉強しました。また、インタビューする時、録音させてもらいました。この録音を聞いて、自分でレポートを完成しました。この過程で、私の聞き取りの能力と文章を書く能力も伸びたと感じました。

最後に、インタビューを通じて、私はテーマについて、深く理解しました。インタビューの相手から、コンビニについての問題について、いろいろな考え方や意見を教えてもらいました。それが私にとって一番重要なことでした。

■董 倩好さん

今学期、日本語読解上級2Aクラスは『インタビュー・プロジェクト』を中心とした授業を行った。

インタビュー・プロジェクトとは、参加者各自が関心のあるテーマについて調査し、大量の文

章を読んで、読解文を要約し、インタビューする質問を用意し、その後、担任の梅村先生から、インタビュー対象者の個人情報を持ち、約束をとり、インタビューを行うという授業である。

インタビュー対象者に約束を取りに行ったときに、敬語の使い方を改めて勉強し、ここで考えたことは、敬語の使い方は学校だけではなく、やはりこれから社会に入っても必要であり、敬語を正しく使えと、本当に役に立つということだ。

また、インタビュー期間中、文章を読む能力、日本語でのコミュニケーション能力、論文を書く能力を高めることができ、大変勉強になり、とてもいい経験だったと思う。このような機会を提供していただいたことにより、学習意欲が向上したと思う。

■趙 憲さん

私はインタビュー・プロジェクトを開始して以来、日本人の中国観について、いままで以上に新しい発見をした。日本人の考え方と国際視点のことを聞きながら、勉強したことも非常に重要なことだった。インタビュー・プロジェクトを順調に進めるため、一生懸命に自分の日本語能力を向上させた。また、日中に関するニュースと日本人が興味を持つ話題からインタビューの内容を変えることは、自分の日本語能力とコミュニケーション能力をアップさせることになった。

もう一つは、日本人の目を通じて自分の国を見るという、客観的な見方は中国人だけではできないということである。中国人の短所と長所はなんだろうか。中国は今、現在の発展の段階でどんな問題をもっているのか。日本人の目を借りて新しい問題をたくさん発見できたのは、このインタビュー・プロジェクトを通じて、一番勉強になったことだと思う。

■呉 賢峰さん

今回のインタビュー・プロジェクトは、今まで日本での生活を思い出して、自分が思っていたことや理解出来ないことや不思議だと思っていたことなどを、日本人と交流して、今までの疑問を解決し、自分の知識も深めていくチャンスであった。録音したインタビューの内容を聞きながら、自分の足りない点を見直した。最初の緊張感に打ち勝って、日々成長する日本語能力に満足せず、次のインタビューに臨んで、日本人とのコミュニケーションすることが楽しみになった。

また、インタビューを通して、我々は、自国と違う文化や生活習慣、考え方などを体験することも大切であった。

■金 培芳さん

インタビュー・プロジェクトという授業を通じて、いろいろな勉強ができたと思います。まずは、テーマを決めるために、たくさんの参考資料や文献などを読み、そのおかげで読書能力も前より高くなったと感じました。そのうち、専門的な知識も身につけました。それと、インタビュー

をしなければならないので、人とのコミュニケーションができました。インタビュー相手によって、話し方も変わってくるので日本語をもっとより正しく使い、とても良い練習になりました。前は日本語で話すのがいつも恥ずかしいと思い、日本に暮らしても、あまり日本語を正しく話せませんでした。それぞれの方にインタビューをしたおかげで、日本語がだんだん話せるようになってきました。人とのコミュニケーションも好きになってきました。日本人と会話できてよかったですと強く感じました。そして、インタビューの内容は、正しい文章に書き直さないといけないので、日本語の基本的な文法から、特有な表現までもう一度勉強になりました。書く能力もいつの間にか身に付けたかもしれません。一言で言ったらインタビュー・プロジェクトという授業を受けてよかったと思います。

■鄭 炎娟さん

『読解フィールドワーク』と『インタビュー・プロジェクト』は、私にとってたいへんためになりました。

まず、『読解フィールドワーク』で、短時間に正しい情報を得る能力が伸びたと思います。『インタビュー・プロジェクト』のプロセスで、日本語表現を勉強しました。日本人にインタビューする場合、インタビューする相手の年齢や地位に応じて、日本語の待遇度を変えなければなりません。今回、インタビューさせていただきました5人の相手は、皆、私より年上で地位も上でした。初対面でのインタビューの予約を取りに行く際に、いつもは使わない敬語を使わなければなりません。インタビューの時にも、質問が聞き取れるように正しい日本語を使いました。インタビューの後にレポートをまとめる時も、日本語の文法の勉強になりました。

さらに、私は「日本の夫婦関係について~国際結婚と比較して~」というテーマについてインタビューしたのですが、インタビューする相手から、婚姻のことをいろいろ教えていただきました。文化の違いは同じ国の人の間でもあります。夫婦関係がうまくいく方法が少し分かったと思います。

最後に、人間関係と礼式のこと、だんだんうまくなったと思います。インタビューを通じて知り合った人も増えました。個人の世界も広がりました。これからは出会った人をもっと大事にしようと思いました。人に感謝をきちんと表明することの大切さも分かりました。

IX 残された課題

毎年、このプロジェクトを始める前に、口を酸っぱくして、繰り返し強調することがある。それは、高校までの「勉強」と大学からの「研究」の違いについてである。この違いについては、いろいろな説明が可能だろうが、私は決まって次のようにいう。

『勉強』は、先生が君たちに発問し、それに対して学生が答えるものである。それに対して、『研究』とは学生たる君たちが、ほかならぬ君たち自身に向けて問いを発し、自ら答える営為である」

そしてなお言う。

『勉強』はあなた自身のためにすること。それに対して、『研究』はみんなのためにすること」この2つの命題について、くださしい説明は必要ないだろう。研究者であればだれもが深く肯られると信じる。しかし、留学生（たぶん日本人の学生も）には、なかなかピンとこない。いわゆる「勉強」が不得手な留学生はもちろんだが、成績優秀な理解力のある学生でも、「勉強」と「研究」の区別を水際立ってわかっている学生はほとんどいない。

その結果、留学生は、読解フィールドワークを通して、自分の関心のあるテーマを見つけることができても、なかなか問題提起ができないという事態に陥る。つまり、自らに問いを向けることができないのである。また、なんとか問題を提起できても、それに対して答えを導き出すことができない。つまり仮説を設定することができないのである。

そういう学生は次にどういう挙に出るか。自分自身、心底、疑問に思っているわけでもないことを適当に発問し、検証するまでもない当たり前の結論を「仮説」として提示してくるのである。そして、その「問題提起」と「仮説」をもってインタビューに臨み、「やっぱり私の思ったとおりでした」というレポートを書く。つまり、「仮説」は検証されましたと主張して得々としている。

だが、あらかじめ答えの出ているような問題は、そもそも「問題」とはいえないし、あえてインタビューで確かめる価値もない。たんにインタビューと、それに続くレポート課題を遂行するためだけに、おぎなりの「問題提起」と「仮説」を立てているだけなのである。当然、そんな「研究」には、何の発見も驚きもなく、“人類の進歩”にも“世界の平和”にも“学術の発展”にも寄与していない。つまり書くに値しない、読むに値しない。世のため人のためになっていないのである。ただ、学生自身の「勉強」にはなったかもしれない。でも「研究」にはなっていないのだ。

ということで、来年度もこの「読解フィールドワーク」と「インタビュー・プロジェクト」を続行していくなら、参加学生には、ぜひとも、テーマを発見し深めるだけにとどまらず、インタビューするだけの価値のある「問題」を提起して、その「問題」に対して大向こうをうならせるような、発見のある「仮説」を見出してほしい。

そして、教師たる私は「どうしたら、自ら問いを発し、自らその答えを探りあてるように留学生を仕向けていけるか」という「問題提起」を立て、その答えになる「仮説」を来年度一年かけて検証していきたいと考えている。

Appendix

2009年 月 日

インタビュー・プロジェクト 評価表

学生氏名 _____

評価者氏名 _____

- | | | | |
|--------------------------------------------------|-------|---------|--------|
| 1. インタビューを依頼するときの学生の態度や言葉遣いはどうでしたか。…… | よかった | 普通 | わるかった |
| 2. 学生から、あらかじめインタビューのテーマについて説明がありましたか。…… | あった | | なかった |
| 3. インタビューは、約束の時間から始まりましたか。…… | はい | | いいえ |
| 4. インタビューの質問内容は、テーマに沿った適切なものでしたか。…… | 適当だった | 普通 | 不適当だった |
| 5. インタビュー時のあいづちやうなずきは適当でしたか。…… | 適当だった | 普通 | 不適当だった |
| 6. インタビューのとき使われた日本語が聞き取れないことがありましたか。…… | あった | ときどきあった | なかった |
| 7. インタビューのとき、学生は記録をとっていましたか。…… | はい | | いいえ |
| 8. インタビューが終わったとき、学生はきちんと感謝の意を表明しましたか。 | はい | | いいえ |
| 9. 今回のインタビュー全体を通して、当該学生から受けた全体的な印象を、短く書いてください。…… | | | _____ |
| | | | _____ |

* ご協力ありがとうございました。